



上条まつり 御神幸・小旗の子供たち (6月15日)

主な内容

- 加茂市成人式に239人出席…………… 23
- 春の叙勲…………… 45
- 全国建具展示会に加茂の建具…………… 5
- 加茂市国際交流協会…………… 67
- 加茂の風土記…………… 8

加茂病院は加茂市の宝 加茂病院を盛り立てましょう

2011加茂市成人式 KSS20 ～逢いたかった20才の俺ら～



K (加茂) S (新) S (成人)



五月三日、文化会館で成人式が開催されました。今回の成人式には、平成二年四月二日から平成三年四月三日までに生まれた人たちが、加茂市内の中学校を卒業した人など三百十九人です。このうち式典には二百三十七人が出席しました。

式典で、小池清彦市長は祝辞の中で、易経から「天行は健なり、君子以て自強（じきょう）して息まらず」と、論語の中から「仁を以て己が任と為す」の二つの言葉を贈り、成人となった会場の人たちに、さら

なる活躍を期待しました。

そして、加茂市が県立加茂病院の充実と救命救急センターの設立に取り組んでいることについて、述べました。

また、少子化を止めるために、日銀引受の国債発行によって拡大財政政策をとり、少子化を止めることに成功した国にならうと、国のお金で十分な子ども手当を支給し、三年間十分な育児休業手当を支給することとすべきであると述べました。

また、「現在の憲法は、平和憲法としてとても優れたものです。今、この憲法を改正したら、海外派兵を求められることになり、海外の戦場で日本人が命を落とすことになりかねません。日本は、世界が認める平和国家です。この平和憲法を皆さんが守ってってください」と述べました。

二十歳の誓いで森山悟さんが「責任を持った行動と言葉を心がけ、さまざまな経験を重ね、つらいときは加茂の仲間たちを思い出してがんばります」と述べました。

このあと、ステージで卒業中学校ごとの記念撮影と、産業センターでのパーティで成人の日を祝いました。



三浦伸一 教育委員長



二十歳の誓いを述べる 森山悟さん



小池清彦 加茂市長



春の叙勲

公共のために尽くされたとして、春の叙勲において加茂市から三名の方が受章されました。今年は三月十一日に発生した東日本大震災のため、六月の発表となりました（発令日は四月二十九日付）。

瑞宝双光章

（人権擁護功労）



春日道雄さん
（上町・72歳）

昭和五十一年から平成十三年までの約二十五年間にわたり、人権擁護委員としての活動が認められての受章には「恐縮するばかりです」との言葉をお聞きしました。

上町・廣圓寺住職の春日さんは、開教師としてアメリカ・ハワイに赴いた経歴をお持ちで、帰郷後、すぐに法務局から人権擁護委員に薦められました。

「同じ人間として認めない」と

いう差別問題は、さまざまな場面

や事件の根底に存在し、それを取

り除くための研修や学習会には腐

心することが多かったとのこと

です。昭和五十年代からは、経済・

産業構造の変化、情報の多角化な

ど、さまざまな社会環境が変化し

た時代でもありました。その中で、

人権問題は、差別を受ける悲しさ

や、差別する側の心の呵責につ

いても考えなければならぬとい

ます。また「いじめ」の低学年化

や携帯電話・パソコンを介して、

目に見えないところで広がる「い

じめ」が社会問題として大きく取

り上げられ、学校の先生方や児童

生徒への学習機会を増やしてい

た時期でもあったそうです。

趣味の一つに陶芸観賞という春

日さん。全国の窯元・産地を訪ね

たこともあり、その地に栄えた理
由や発展・振興の歴史をたどるの
も「楽しいです」とお話をいた
きました。

瑞宝双光章

（教育功労）



金子勝男さん
（八幡2・70歳）

四十一年間にわたり、公立・私立の中学校教師として教育現場で活躍されてきた金子さん、受章を伝える電話を受けたときは、「驚き」と「大震災の復旧・復興の最中、（受章を）受けてもいいものだろうか。」という思いも頭をよぎったそうです。

加茂市内には昭和四十五年から四年間、若宮中学校に勤務し、退

職した今、教えた生徒たちの元気な姿を見かけると「うれしくなる。」と言います。

最初の勤務校の夏休みに、東京で学校図書館司書教諭の資格を取得。現在は購入図書に本の分類や内容などが書かれた資料が付いているそうですが、当時の学校図書館には、基本図書目録などが整備されていませんでした。そこで目録（図書カード）の作成、貴重だった本の修復を、それ以後、勤務校が変わっても続けてきたと、思い出されます。また、教諭として研修機会に恵まれ、文部省（旧）の海外研修ではアメリカ、西ドイツ、デンマークなど三方国の学校教育現場を見ることが、変化する教育現場や指導方法に参考となりました。

「趣味がない。」と話す金子さんは、「無趣味だから学校のことしかしなかつたのかな。」と言い、「家族と同僚・PTAや学校関係の皆さんのおかげです。」と話しておられました。

藍綬褒章

(更生保護功勞)



浅野 伸介さん
(秋房・75歳)

受章の知らせを受けてはじめて思ったのが「もうそんなに務めたのかな」という浅野さん。昭和六十年から二十五年にわたり保護司を務めていて、社会復帰する人たちのお手伝いと、犯罪のないまちづくりの活動に取り組んでいる功勞により受章されました。

保護司の仕事としては「保護観察となった人の話をただ聴くだけで、こちらから何かをしたり、話すことは少ないんですよ」と言い、続けて「社会復帰を手伝う人がこのような表だって褒章を受けていいものだろうか」との感想もいただきました。大学卒業から九年間、小学校教諭を経験したことが「多少なりとも役に立っているのかな」と言い、いろいろな人たちの話を聴くことが自分のためにもなっているそうです。また、人

間関係や隣近所の付き合いが希薄になってきている社会では、犯罪予防の活動もこれまで以上に大切になっていきます。

趣味は登山。山の話を始めると時間を忘れるほどやめられないと前置きし、梅雨明けに穂高から槍ヶ岳の縦走を毎年欠かさないとのこと。「いつから」とお聞きすると「新潟大学登山部創部メンバーの一人」とのこと、山小屋の主人とは「また来たよ、待ってたよ」という仲だそうです。

家の仕事も保護司の仕事も山登りも家族の理解がなければ「続けてこれなかったことは確かかな」と話していただきました。

全国建具展示会厚生労働大臣賞受賞

伝統技術「組子細工」の建具職人

渡辺文彦さん

岐阜県で開催された第四十五回全国建具展示会で、渡辺文彦さんの出展作「湧雲」が厚生労働大臣賞を受賞しました。渡辺さんにとり、この大会での受賞は四回目となります。

出展作は二間四枚のふすま戸で、大地から上空へと沸き上がっていく雲の様子が組子細工で表わされています。この組子には九万个以上の部材が使われていて、完成までに約一年かかりました。この出展作は、展示会用に製作されたものでなく、一般住宅

用に注文を受けたものを、施工さんの了解を得て、出展したもので、実際の住宅に納めて、違和感や圧迫感を感じないよう組子の色合い・図案に注意を払ったそうです。

渡辺さんは、平成十五年に内閣総理大臣賞、平成十九年には「現代の名工」にも選ばれています。「どんな仕事でも、寸分の狂いのないものをつくる」ことが職人の本分と考え、今回の大会には、加茂が産地として高い技術と品質を持っていることを知ってもらいたいという気持ちで出展したそうです。



加茂市国際交流協会総会・国際交流の集い



六月三日、産業センターで加茂市国際交流協会の総会と在住外国人を招いての国際交流の集いが開催されました。

総会では、ロシア・コムソモリスク市からの子ども代表団受け入れや世界の料理パーティーなど今年度の事業が提案され、すべての議案に対して、会員の皆様から承諾されました。コムソモリスク市との交流事業では、現在、新潟とハバロフスクを結ぶ航空便が運休中とのことで、成田空港を利用しての訪問となる予定となるそうです。また、新潟経営大学から、加茂市と国際交流協会からの留学生支援への感謝のことばと、東日本大震災による留学生の状況が報告されました。震災後、一時帰国する学生がいたそ



うですが、現在は全員が学校に戻り、通常通りの授業やカリキュラムが行われているということです。

総会后、産業センター大ホールで「国際交流の集い」を開催し、市内・近郊在住の外国人約四十人を含む百二十人あまりの人が参加しました。県内でもこの「国際交流の集い」のような機会はあまりなく、市外から参加される方は、テーブルを囲んで加茂のおいしいお店や食材を売っているお店の話題などを楽しんでいました。





明治十四年の五反田破堤

明治前期の災害(1)

日本一の長流信濃川が流れる加茂市域は、大正十一年に大津分水が通水するまでは、頻繁に大洪水に見舞われた。三月十一日に発生した東日本大震災の惨禍が記憶に新しい今、郷土の先人の苦難に思いを馳せてみたい。

明治十四年（一八八二）四月末、大雨に雪解け水も加わって信濃川が五反田村で破堤した。次は破堤一か月ほど後の「新潟新聞」の現地報告（要約）である。

前須田等が最も甚大で、人民の惨状は言うに忍びない。良田は、池と変じあるいは高さ一丈（三メートル）ほどの小山に変わり果てている。県庁も役人を派遣して尽力しているが、中蒲原郡の今年の収穫はどうてい見込めない。

機械排水のない当時、流れ込んだ水は下流部で自然に流れ出るのを待つしかなかった。信濃川左岸

に広がる中蒲原郡は高低差が少なく、一か月近く経過してもまだ水が引いていない。農作物は壊滅同然だったことだろう。五反田村はこの年の水害で、約六十ヘクタールの耕地のうち五十ヘクタールが砂入り、あるいは池成りの荒れ地になったという。

翌十五年の夏にも再び信濃川が大洪水となった。「新潟新聞」は

昨年の洪水で活路を失い、将来どうしたら良いかと思案しているところへまたもの災害で、茫茫たる砂漠となり、一本の青草も望み得ない状況である。朝には農夫の慟哭する姿を見、夕べには老少の飢寒に涕泣すると聞く、その惨憺悲哀のさまは、二度と目にするに忍びない。

と報じている。

こうした大洪水の連続を受け、明治二十年代に信濃川の流路を直線化する国・県の工事が行われ、現在の河道となった。このさい五反田村全村四十一戸が、新しく築かれた堤防の内側（現在地）に集団移転した。

（溝口敏磨）

加茂の風土記

破堤は九十メートルほどで、流れ込んだ激流は幹回り一丈五尺（四・五メートル）の太木を押し流し、流失した樹木は数知れずである。家屋・土蔵などは今現在も鴨居まで水につかたまま、隣家へ行くにも船で行き来している。この洪水で白根郷一帯が被害にあったが、五反田・後須田・北潟・



五反田の移転記念碑

歯っぴいスマイル加茂

六月五日、市役所市民ロビーで開催された無料歯科健診には、大勢から来ていただきました。子どもは歯より、保護者の歯の健康管理を指導される方もいたようです。



人口のうごき

6月1日現在
世帯 10,179 (+2)
人口 30,423 (-25)
男 14,696 (-17)
女 15,727 (-8)
()内は前月比
(5月異動分)
出生 18 (男5女13)
死亡 31 (男16女15)
転出 46 転入 34